

【事例紹介】

# 対面のコミュニケーション授業の オンライン化について

—新潟大学の例を通して—

The Pedagogical Effects of Converting a Face-to-Face  
Course to an Online Course: A Case of Niigata University

新潟大学教育・学生支援機構留学センター 蒙 韞

MENG Yun

(Center for International Education, Institute of Education and Student Affairs,  
Niigata University)

キーワード：オンライン授業・活動、ディープ・アクティブラーニング、海外留学

## 1. はじめに

社会のグローバル化に伴い、英語でプレゼンテーションやコミュニケーションをする機会が増えてきた。日本人学生にも、将来、海外研修や留学、海外の研究発表会、フィールドワークやイベント等に参加する時、また国際的な仕事に携わる際に不自由なく英語でプレゼンテーションやコミュニケーションできる能力が求められてきている。そのため、本授業は、グローバル環境の中で大勢の人を前に自信を持ってモノが言え、PowerPoint等を用いて英語でプレゼンテーションやコミュニケーションをすることができる人を育成する。また、対面のコミュニケーション授業をオンライン化する時、どのようにディープ・アクティブラーニングを実現することができるのか、そしてコロナ禍による海外の大学や学生との連携が難しい場合、どのように「内なる国際化」(Hunter, 2020)を実現することができるのかを探る。

## 2. オンライン授業・活動の概要

本授業は、松岡・立野・三宅(2014)を教科書とし、「深い学習」「深い理解」「深い関与」という学びの深さ(松下 2015)に焦点を当てて授業・活動を設計した。具体的には、授業・活動の全体が「Project 1: 自己紹介で自分をアピールする」「Project 2: 日本の魅力を世界に紹介する」「Project 3: 将来の計画について話す」という三つのプロジェクトにより構成された。そのうち、Project 1と3は個別、Project 2はグループでのプレゼンテーションとなった。また、各プロジェクトの学習目標は以下、表1の通りとなる。

表1 各プロジェクトの学習目標

プロジェクト	英語スキル	プレゼンテーションスキル
Project 1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自己紹介を英語で行うことができる。</li> <li>・自分の過去、現在、将来について英語で述べることができる。</li> <li>・自分の興味、性格、長所、短所などについて英語で説明できる。</li> <li>・自分に関する英語の語彙、表現に慣れる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内容と時間からプレゼンテーションを適切に構成することができる。</li> <li>・PowerPointの基本操作ができる。</li> <li>・スライドに適切なキーワードを入れられる。</li> <li>・スライドに写真やイラストを入れられる。</li> <li>・初歩的なプレゼンテーションを実行することができる。</li> </ul>
Project 2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本の魅力を海外に英語で伝えることができる。</li> <li>・そのためのリサーチを英語で行うことができる。</li> <li>・「日本」を説明する語彙や表現に慣れる。</li> <li>・楽しいトークが英語でできる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「情報伝達」＋「説得」のプレゼンテーションができる。</li> <li>・グループによるプレゼンテーションの準備と発表ができる。</li> <li>・グループでの楽しいトークができる。</li> <li>・効果的なスライドを作ることができる（日本的な演出）。</li> <li>・音楽（BGM）を効果的に使える。</li> </ul>
Project 3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の将来について英語で発表ができる。</li> <li>・自分の将来についてリサーチを英語で行うことができる。</li> <li>・「職業」を説明する語彙や表現に慣れる。</li> <li>・データに基づいたトークが英語でできる。</li> <li>・質疑応答を英語で行うことができる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・個人でプレゼンテーションの準備と発表ができる。</li> <li>・リサーチ（データ）に基づいた発表ができる。</li> <li>・データ（グラフ）をスライドに表現できる。</li> <li>・展開・時間管理を個人で行うことができる。</li> <li>・質疑応答を行うことができる。</li> </ul>

さらに、各プロジェクトの設定、目的、形態と時間は以下、表2の通りである。

表2 各プロジェクトの詳細

プロジェクト	設定	目的	形態	時間
Project 1	留学生が混じるクラスでの初回の授業で自己紹介をする。	外国人クラスメートに自己紹介をし、自分をアピールする。	個別でのプレゼンテーション	2分/人
Project 2	学生が作る海外向けのTV番組 “Introducing Japan”	日本の魅力を世界に紹介し、より多くの海外の人々に 1) 日本のことを理解してもらう。 2) 日本のことに興味を持ってもらう。 3) 日本を訪れてみたいと感じてもらう。	グループ(4-5人)でのプレゼンテーション	10分/グループ
Project 3	学生の国際交流会	自分の将来について 1) 具体的な計画を述べる。 2) データに基づいた説明をする。 3) 実現するために今できることを語る。	個別でのプレゼンテーション	4分/人

最後に、各プロジェクトは、下記図1のような流れで進めた。



図1 各プロジェクトの流れ

なるべく対面のコミュニケーション授業と変わらないように、顔出し、ミュート解除や名前・ニックネーム表記で話しやすい環境を作った。また、学期当初に親近感を生み出すため、ゲームやZoomの投票機能によるクイズも用いた。それから、グループワークやピアワークにZoomのブレイクアウトセッションとホワイトボード、評価にZoomの投票機能(同期)およびGoogleフォーム(非同期)を活用した。これらの活動により、学習者の能動的な学習を促し、オンライン上のディープ・アクティブラーニングを試みた。さらに、課外活動として、学生が予習、復習、英語原稿やPPTの作成に当たっての素材(資料・情報・写真やイラスト・音楽)収集、発表の準備等をした。授業外のやり取りやコミュニケーションは、新潟大学の学務情報システムを使用した。

成績・評価は、スピーチ原稿が30点(各プロジェクト10点)、および、プロジェクト発表が70点(Project 1と2が各20点、Project 3が30点)にした。なお、Project 3では発表原稿、スライドと

発表に対する自らの気付きも評価の対象とした。また、学びの質や学習者のモチベーションを向上させるため、各プロジェクトには同じ「プレゼンテーション点検・評価シート」(表3のような、①スピーチ・メッセージ、②視覚的メッセージ、③身体的メッセージという三項目における5段階評価)を用いて自己評価と他者評価を行った。そして、増点の対象となったのは、①グループで進めたProject 2ではチームワークとリーダーシップ(最大5点)、②他人のプレゼンテーションに対する質問かコメント(1点増点/質問かコメント)。

表3 「プレゼンテーション点検・評価シート」(自己評価と他者評価 共用)

点検・評価 項目	評価	コメント
<b>1. Speech Message</b> スピーチ・メッセージ	1 2 3 4 5 低い → 高い	
1) Plain English 平易な英語	1 2 3 4 5	
2) Rhetorical Questions 修辭的問い掛け	1 2 3 4 5	
3) Logical 論理的、 分かりやすい展開	1 2 3 4 5	
4) Interesting (Funny) 面白い内容	1 2 3 4 5	
<b>2. Visual Message</b> 視覚的メッセージ		
1) Key Words / Numbers キーワード / 数字	1 2 3 4 5	
2) Enumeration 列挙	1 2 3 4 5	
3) Images (Photos, Illustrations) 画像 (写真、イラスト)	1 2 3 4 5	
4) Charts / Graphs 図表 / グラフ	1 2 3 4 5	
<b>3. Physical Message</b> 身体的メッセージ		
1) Voice Inflection 声の抑揚	1 2 3 4 5	
2) Eye Contact 視線の合わせ	1 2 3 4 5	
3) Hands, Gestures 手やジェスチャー	1 2 3 4 5	
4) Posture 姿勢	1 2 3 4 5	

Withコロナの新日常、学習環境の変化による学生の様々な不安を取り除くため、対面の授業に比べて、個々の学生とのやり取りをより積極的に行い、フィードバック（Hattie 2008）もより頻繁に行った。

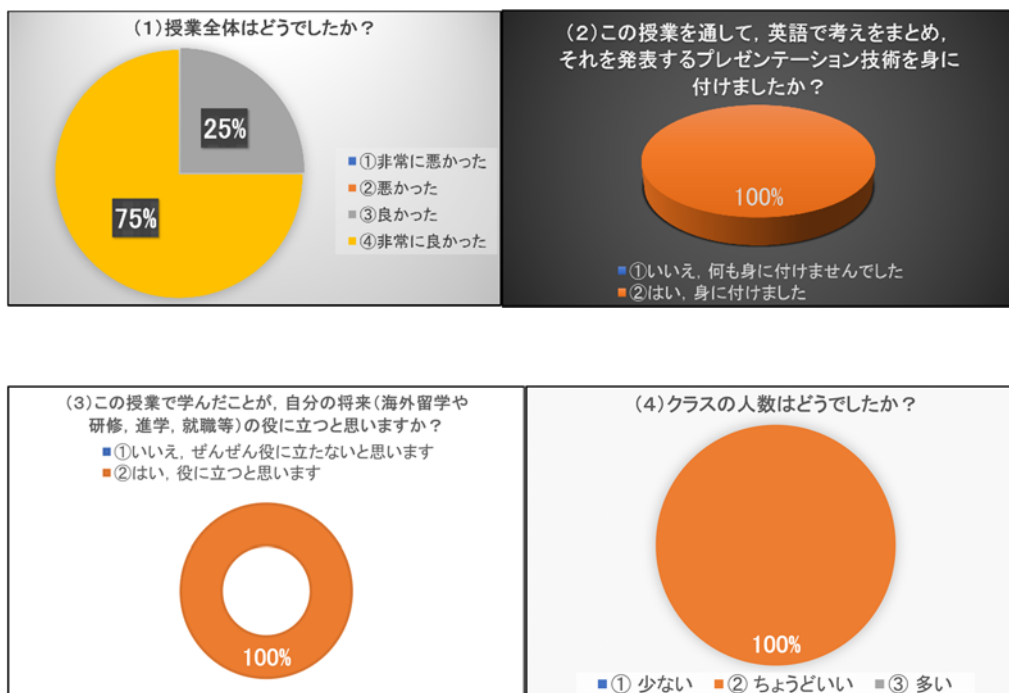
なお、今回の受講生は、理系学生の1～3年生（1年生8名、2年生7名、3年生1名）の合計16名であった。そのうち、女性が4名、男性が12名で、英語能力は初級～中級であった（TOEIC 650点以下）。

### 3. オンライン授業・活動の結果

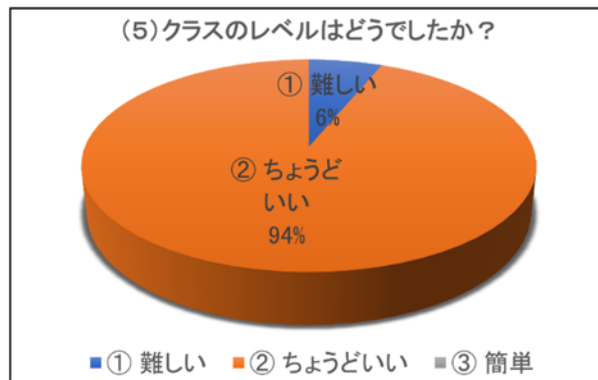
まず、三つのプロジェクトを通して、自分がどれだけ成長したのかを受講生全員に自己評価をしてもらった。その結果、以下のことが分かった。

- 1) 三つのプロジェクトにわたって、全体的にスピーチ・メッセージ、視覚的メッセージと身体的メッセージに関する英語でのプレゼンテーション能力が向上したと報告された。しかし、スピーチ・メッセージとしての「内容の面白さ」と身体的メッセージとしての「視線、手等のジェスチャー」という点において、まだ足りないという認識だった。
- 2) 受講生全員が Project 1、2 と同じミスを繰り返さないように、自ら Project 3 の発表原稿、スライドと発表を見直したが、86.7%は発表の直前までに自らスライドを改善・修正したことも窺われた。次に、1学期が終わった後、受講生全員にアンケートをした結果、以下のことが明らかになった。

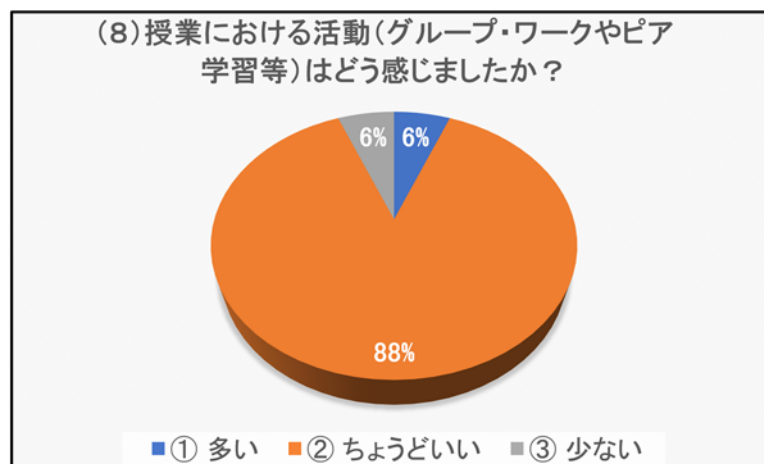
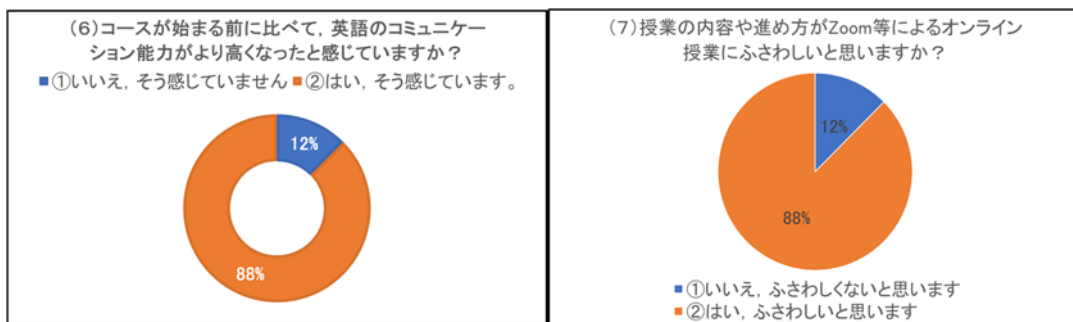
- 1) 下記の図のように、受講生の全員は「授業全体が（非常に）良かった」「この授業を通して、英語で考えをまとめ、それを発表するプレゼンテーション技術を身に付けた」「この授業で学んだことが自分の将来（海外留学や研修、進学、就職等）の役に立つと思う」「クラスの人数がちょうどいい」と回答した。



2) 下記の図のように、受講生の94%は「クラスのレベルがちょうどいい」と回答した。



3) 下記の図のように、受講生の88%は「コースが始まる前に比べて英語のコミュニケーション能力がより高くなったと感じている」「授業の内容や進め方がZoom等によるオンライン授業にふさわしいと思う」「授業における活動（グループ・ワークやピア学習等）がちょうどいい」と回答した。



4) 1学期を振り返って受講生から下記の感想や意見をもらった。

【Positive】

- ① いろんなことを身に付けることができた。



- ② Zoomという限られた環境下ではあったが、そんな中でも自らの英語でプレゼンテーション能力を向上することが出来たと強く感じた。
- ③ とても親身に悩みを聞いてくださってありがとうございました。なんとか帰ってこれたのも先生のおかげだ。ありがとうございました！
- ④ パワーポイントを使えるようになったことが、個人的に一番の学びかなと思っている。また、プレゼンすること自体に少し自信が付いた気がする。ありがとうございました！
- ⑤ 今後の授業で、TED鑑賞会も入れていただければと思う。そうすると、外国の方が実際にプレゼンしている様子についてさらに勉強できるから。
- ⑥ 英語の決まり文句や間違いやすい文法を学べた。
- ⑦ この授業の良かった点としては、英語でプレゼンをするための原稿の書き方や、授業が進むごとにスライドを作成するうえで気を付けることを知ることが出来た点。他の学生や先生との距離も近く感じ、オンラインの弊害をあまり感じなかった点だと思う。
- ⑧ プレゼンテーションの技術を身に付けることができ、多学年とも交流できたのは良かった。

#### 【Negative】

- ① テーマが難しくて原稿が書けないことがあった。特にProject 3。
- ② オンラインよりも対面の方がやりやすかったらなあーと思った。
- ③ 授業時間を超える日が多かった。仕方ないと思う。

また、①というネガティブな感想や意見について、授業後、受講生との相談から、その原因として、次のことが考えられた。まず、Project 3では、将来の計画、具体的には、在学中やりたいこと、大学卒業後の進路と将来の家族像・プライベート計画を書くため、大学に入学したばかりの1年生にとって、在学中やりたいこと、特に大学卒業後の進路を考えることが初めてとなり、すぐ自分の考えや計画をまとめて英語で書くことが難しかった。また、2年生は、大学で1年間を勉強した後、将来の進路に関する考えや計画が入学の時と違った人もいて、まだ迷っている最中、自分の心の葛藤を英語で表現することが難しかった。次に、Project 3の「データに基づいたトークが英語でできる」という目標が、データに慣れてきた3年生にとっては、容易であったが、1年生と2年生にとっては、難しかった。

#### 4. まとめ

今回の試みから、オンライン授業におけるディープ・アクティブラーニングを実現するには、以下のことが必要だと分かった。

- 1) 学習者が主体であり、学習目標を達成できること

- 2) 学生間の協働や気付きにより、学習や理解を深めさせること
- 3) 効果的なファシリテーション
- 4) 自己評価と他者評価の両方により、成績・評価を可視化すること
- 5) 学習者が安心・信頼して学習を進められる環境・ネットワーク作り

また、今後の課題として、下記のことが考えられる。

- 1) オンラインで活発に意見交換するためにどんな工夫が必要なのか。
- 2) 学生間個人差(言語能力・ITリテラシー・インターネット等の差)をどのように乗り越えるか。
- 3) 「内なる国際化」を実現するためにどうすれば、教員間・教職員間・国内大学間の連携を強められるか。

## 参考文献

1. Fiona Hunter (2020) Building a Stronger Future for Internationalization: From Reflection to Action, 基調講演「新型コロナ禍と国際教育の将来像」、Summer Institute on International Education, Japan(SIIEJ 2020)
2. John A. C. Hattie (2008) *Visible Learning: A Synthesis of Over 800 Meta-analyses Relating to Achievement*. Routledge
3. 松岡昇・立野貴之・三宅ひろ子(2014)『Presentations to Go: Building Presentation Skills for Your Future Career DVDで学ぶ はじめての英語プレゼンテーション』センゲージラーニング株式会社
4. 松下佳代・京都大学高等教育研究開発センター(2015)『ディープ・アクティブラーニング: 大学授業を深化させるために』勁草書房